

ソクラテス Socrates 470[469] ~ 399B.C.

古代ギリシアの哲学者。石工(彫刻家)の父ソプロニコスと産婆の母パイナレテの間に生まれる。彼は子どもの頃から神(ダイモン)の指示を受け人間としてふさわしくない行為を自制していたが、ペロポネソス戦争に三度従軍するなど、アテネ市民としての義務は果たしていた。しかし、スパルタの将軍としてアテネを破ったアルキビアデスがソクラテスの弟子であったことや、アテネを混乱させた三十人政権(トリアコンタ)のリーダーであるクリティアスと親しかったことなどが原因で法廷に訴えられ、裁判で死刑判決を受けて、毒杯を仰いで獄死した。彼の妻クサンティッペは悪妻(かなり誇張されている)として有名であるが、これはソクラテスが人々との哲学的対話に明け暮れ生活が厳しかったことや、裁判で刑死したことなど、家族を省みなかったことを原因としている。

ソクラテス自身は著作を残していない。それでも、クセノパネス『ソクラテスの思い出』やプラトン『ソクラテスの弁明』等の対話篇、またはアリストテレス『形而上学』の記述から、彼の周りにいた人物が彼について書いた記述からその行動や思想を知ることができ、彼の影響力や偉大さがわかる。ソクラテス以前の哲学者が自然や宇宙の原理を探求したのに対して、ソクラテスは日常の生活で善く生きるために魂(自己)の問題を探求することによって、人間の内面へとその思索の対象を変えた。ソクラテスは、人間における知の存在を研究していく学問としての哲学を成立させたのである。

Great Books 09 ソクラテスの弁明(Apologia Sokratis)

プラトンの著作。プラトンが各対話篇で描くソクラテス像は、常に問う人である。

ソクラテスは、「ソクラテスよりも賢き者なし」というデルポイの神託を聞いた後、その神託の意味を確かめようとして各界の有識者と対話を行った。そして彼は、「**自分は無知であることを知っている**」ゆえに最も賢い者である、とこの神託を理解した。

ソクラテスの対話の方法は、あることについて対話相手の定義を求め、それに対して一問一答形式で相手を矛盾に追い込むというものであった。この行動によって、彼はアテネの有力者の反感を買うこととなった。そして、紀元前 399 年、彼はメレトスによって「ポリスの認める神々を認めず、新奇なダイモンを祭り、青年たちに害毒を与えている」として訴えられるに至った。この時の法廷でのやりとりを記録したものが、『ソクラテスの弁明』であり、プラトンの著作の中では、現実の出来事を忠実に書き残しているものである。

裁判は、有罪か無罪かを定める裁判とその量刑を決める裁判の二段階に分けて行われた。アテネの裁判は、市民の中から選ばれた 501 人の陪審員の多数決で、有罪か無罪かが決定される。前段の弁明で、彼は同情を誘うような弁明は「賢者」としてせず、裁判官になった市民はその時の気分で裁くのではなく法律に従って裁判することを誓ったのであるから、正当な弁明により無罪を獲得できると主張した。しかし、彼は僅差で有罪となり、罰金刑を申し出た後段の量刑の部でも死刑の宣告を受けてしまう。彼は裁判結果への服従と死について語り、次のように締めくくった。

...もう終りにしよう、時刻ですからね。...(中略)...わたしはこれから死ぬために、諸君はこれから生きるために。しかしわれわれの行く手に待っているものは、どちらがよいのか、誰にもはっきりわからないのです、神でなければ。

この後、プラトンは『クリトン』で脱獄を勧める老友に法を守ることにについて、『パイドン』で魂の不滅を説く死生観について、ソクラテスに語らせている。

Key Word 無知の知

人間たちよ、おまえたちのうちでいちばん知恵のある者というのは、だれであれ、ソクラテスのように、自分は知恵に対してはじっさい何の値打ちもないのだということを知った者がそれなのだ、言おうとしているもののようなのです。だから、これがつまり、わたしがいまだにそこら歩きまわって、この町の者であれ、よその者であれ、だれか知恵のある者だと思えば、神の指図にしたがってこれを探し、しらべあせているわけなのです。

< 田中美知太郎(訳)『世界の名著 6 プラトン 1』 中央公論社 >

神の指図 ダイモンの声として、ソクラテスが何か間違ったことをしようとするのを止める声

◆ *Great Books* 文献案内

- 📖 ソクラテスの弁明・クリトン(講談社学術文庫) / 三嶋輝夫, 田中享英(訳)
講談社 1998年刊 236p <131.3/112> 資料番号 21015532
- 📖 ソクラテスの弁明・クリトン(岩波文庫ワイド版) / 久保勉(訳)
岩波書店 1991年刊 117p <131.3Z/101> 資料番号 20344750
- 📖 ギリシア哲学者列伝 上(岩波文庫) / ディオゲネス・ラエルティオス(著) 加来彰俊(訳)
岩波書店 1984年刊 419p <131/テ/1> 資料番号 20436994
- 📖 世界古典文学全集 第14巻 プラトン1 / 田中美知太郎(ほか訳)
筑摩書房 1964年刊 524, 6p <908/29/14> 資料番号 11876125
*ソクラテスの弁明 / 田中美知太郎(訳)
- 📖 雲(岩波文庫) 改版 / アリストパネース(著) 高津春繁(訳)
岩波書店 1977年刊 183p <1991/アA> 資料番号 12281556
- 📖 ソクラテスの思い出(岩波文庫) 改版 / クセノフォーン(著) 佐々木理(訳)
岩波書店 1974年刊 294, 16p <131/クA> 資料番号 12249439
- 📖 プラトン全集1 / 山本光雄(編)
角川書店 1973年刊 525, 35p <131.3/9/1> 資料番号 10209880
*ソクラテスの弁明 / 山本光雄(訳)
- 📖 世界の名著6 プラトン1 / 田中美知太郎(編)
中央公論社 1966年刊 606p <080/5/6> 資料番号 12784245
*ソクラテスの弁明 / 田中美知太郎(訳)
- 📖 プラトン全集 第1巻 / 岡田正三(訳)
全国書房 1946年刊 <131.3/19/1> 資料番号 10210235
*ソクラテスの弁明

◆ 理解を深めるために 参考文献案内

- 📖 ソクラテス以前以後(岩波文庫) / F. M. コーンフォード(著) 山田道夫(訳)
岩波書店 1995年刊 155, 5p <131/コ> 資料番号 20812772
- 📖 ソクラテス最後の十三日 / 森本哲郎(著)
PHP研究所 1995年刊 322p <913.6MM/2307> 資料番号 21555107
- 📖 裁かれたソクラテス / T. C. ブリックハウス, N. D. スミス(著) 米沢茂, 三嶋輝夫(訳)
東海大学出版会 1994年刊 508p <131.2CC/103> 資料番号 20684213
- 📖 ソクラテス裁判(叢書・ユニベルシタス) / イジドア・F. ストーン(著) 永田康昭(訳)
法政大学出版局 1994年刊 439, 23p <131.2CC/102> 資料番号 20666699
- 📖 ソクラテスはなぜ裁かれたか(講談社現代新書) / 保坂幸博(著)
講談社 1993年刊 238p <131.2/108> 資料番号 21549019
- 📖 法の理論8 / ホセ・ヨンパルト, 三島淑直(編)
成文堂 1987年刊 245p <321P/96/8> 資料番号 12412375
*競争と秩序 ソクラテスの裁判と刑死について / 桂木隆夫(著)
- 📖 法の理論3 / 原秀男(ほか編)
成文堂 1983年刊 272p <321P/96/3> 資料番号 12412326
*ソクラテスの死 悪法問題とプラトン哲学 / 森際康友(著)
- 📖 ソクラテス(岩波新書) / 田中美知太郎(著)
岩波書店 1957年刊 214, 13p <131.2E/5> 資料番号 10209815